

【報告】

群馬県立自然史博物館企画展「火の山 —マグマのダイナミックな活動—」における新たな試み

Case Report: Temporary Exhibition “Volcano—Dynamism of Magma—”
of Gunma Museum of Natural History

野村 正 弘* 金 澤 芳 彦*
Masahiro NOMURA Yoshihiko KANAZAWA
三 田 照 芳*
Terufusa MITA

1 はじめに

展示とは、何を、どう提示するかで、博物館の最も表面に現れる部門であり、博物館が一般の人々と最も接する部門である(倉田・矢島, 1997)。よい展示を作り上げるためには、学問的基礎がしっかりしていなければならないことはもちろんである。これに、新たな視点を加え展示を展開する必要がある。そのため、学芸系職員には柔軟な頭脳と強い情熱が要求される。また、見せ方の技術(展示技術)に関する幅広い知識も必要である。

群馬県立自然史博物館は、1996年10月に開館して以来、今年6月に入館者100万人を達成した。しかし、入館者数は徐々に減少しており、魅力的な博物館となることが求められてきた。

そこで、群馬県立自然史博物館の企画展「火の山—マグマのダイナミックな活動—」において、展示、印刷物および広報、関連行事を従来型から脱却して再検討した。まず基本に立ち返り、展示を見に来てもらうにはどうしたらよいか、展示を見てもらうにはどうしたらよいか、展示を理解しさらに深い興味をもってもらうにはどうしたらよいかを自由に発想することから始めた。その中から比較的容易に実行

可能なものを試行した。また全く新たに、企画展示を使った中学校理科の合同授業を試みた。これらについて概要を記するとともに、アンケート結果も交え、結果と若干の考察をまとめて報告する。

2 展 示

2-1 基本的な考え方

資料を比較・対照できるように展示(提示)することで、観覧者に理解を促進させることができる。これは、広く言われてきたことである。

また、学習者(観覧者)が自らの知識に応じて検討し、「わかること」と「わからないこと」が「適当な割合」で混在していることが、学習を促す最もよい方法であると認知心理学的に言われている(倉田・矢島, 1997)。博物館で行われる教育は、個々の人の好奇心(知的探求心)を軸としている、非系統的・非集団的な教育である。よって、ターゲットが絞りにくいいため展示の構成が難しくなる。

さらに、博物館は社会教育施設と言われるものの、観光等の学習目的以外で訪れる人が少なからずいることも事実である。この人たちにとって、博物館が学習施設であるという認識はあまり高くはないと考え

*群馬県立自然史博物館

平成14年5月23日受理

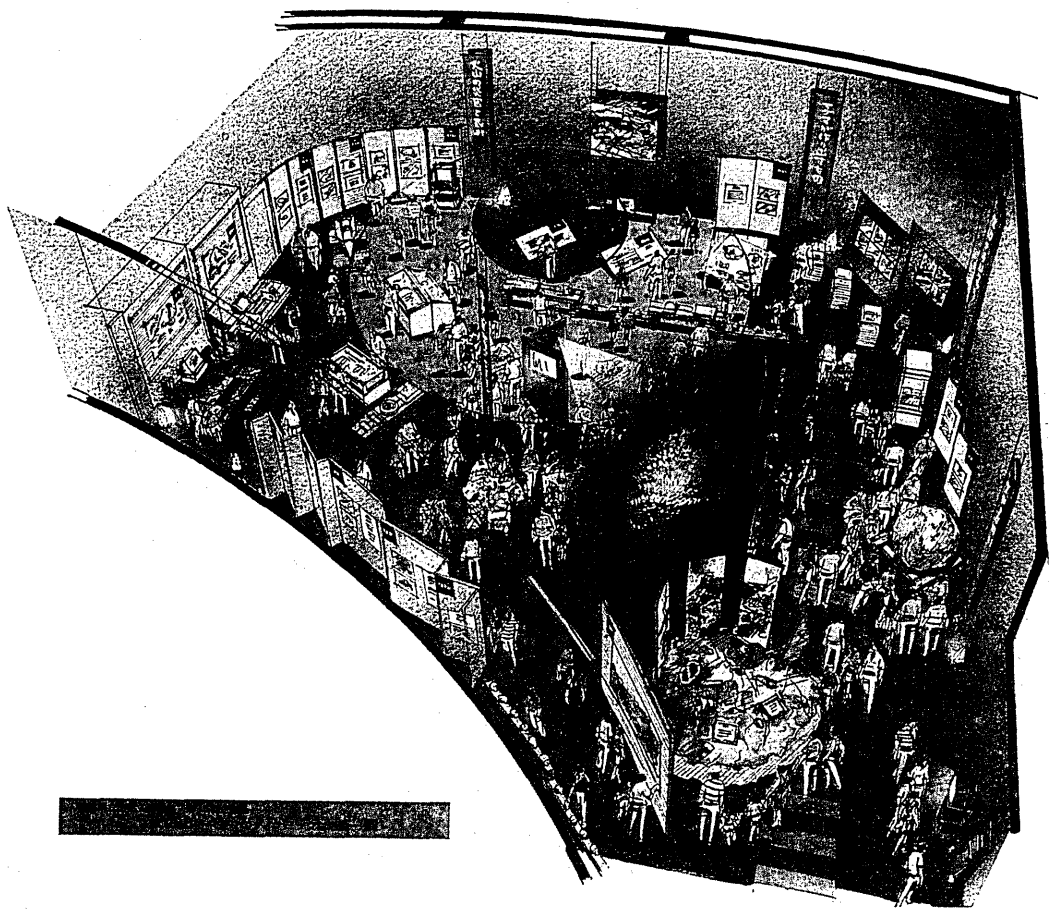


写真1 展示バース

られる。しかし、来館者であることには違いなく、その人にあった楽しみ方ができる空間を“ある程度”提供しなければならない。

これらをふまえ、教育目標を設定した。今回の場合、「火山というものの科学的理解」、「郷土の再認識」、「防災意識の高揚」の3点とした。これらは最終到達目標で、このほかにもねらったことがあった。それは、“感じるということの復権”である。

江戸時代の哲学者三浦梅園は「枯れ木に花咲くに驚くより、生木に花咲くに驚け」という言葉を残している（渡辺，2001）が、まさに便利な現代社会に生きる我々が忘れかけているものであると言える。今回の企画展に当てはめて言えば、堆積岩からなる山が噴火すれば誰もが驚く。しかし、活火山である浅間山が噴火しても改めて驚きはしない。常識とな

っていることを当たり前と片づけずに、改めて新鮮な目で見直すと、違ったものが見えてくるということに気づいていただければと考えたのである。

具体的な展示としては、展示最後の「エピローグ—火山県群馬—」の大型パネルをあげることができる。このパネルには、なるべく一般の人が日常見ているのと同じ角度から撮影した写真で群馬県内の12の火山を、紹介した。個々に解説はつけておらず、中央部右に「もしもに備えて」と題し、簡単な防災に関する啓発を記すにとどめた。素通りしていく人も多かったが、中にはしばし注視し感心する人、驚きの声を上げる人など気づいていただけた人もあった。

前述した学習目的以外で訪れる人にも楽しんで、何かに関心を持ってもらうこと、そして見つけて帰

ってもらえるように工夫した。倉田・矢島（1997）によれば、学習が行われるためには、何らかの「手がかり」が必要であり、その手がかりとは学習者に関心や興味を持たせることである。関心を持つということは、人々がある対象に注意することであり、興味という時は、関心が主として快不快の対象に向けられることとされている。そこでまず、何かに注目させることから検討した。日常イメージと整合的な中に非整合的なものがあると、皆がそれに注目するという心理を利用した。具体的に展示では、入口の泥流災害をイメージしたジオラマ、世界の火山分布をしめした大型の地球儀、大型の宝石原石などである。来館者の反応を見る限りでは十分役立ったと考えられる。

さらに、「展示“で”伝える」、言い換えれば、わかりやすい「メッセージ主導型」の展示となるように心がけた。今回の火山というテーマの場合、恐竜や昆虫のように資料そのものに人気があるわけではない。また、実物資料である火山を展示室に持ち込むことはできない。「資料主導型」の展示にはなりにくいのである。そこで、展示シナリオの作成と資料の選定には多くの時間と労力をかけた。綿密に、「情報をデザインしていった」のである。日本ではデザインというと見た目をキレイにする行為と見なす傾向が強いが、本来はものごとの背後にある見えない関係を発見し、組み替える行為にほかならない（渡辺，2001）。筆者らは、博物館展示にはこの情報デザインの手法がさらに取り入れられ、ハイレベルでわかりやすい展示が作られていくべきであると考えている。

このほか、特に力を入れた展示に関する試みを、以下に記す。

2-2 色彩計画

イメージカラーを設定する目的で、「火山」という言葉から連想される色を調査した。調査には、カラーリストー色彩心理ハンドブッカー（小林，1997）中の5色配色イメージスケールを使用させていただいた。協力者は、筆者らの周囲の人で、主婦やグラフィックデザイナーなど、素人からプロまでなるべく多様な方々に参加いただいた。時間の都合で十分な数の調査とはならなかったが、25人から回答を得

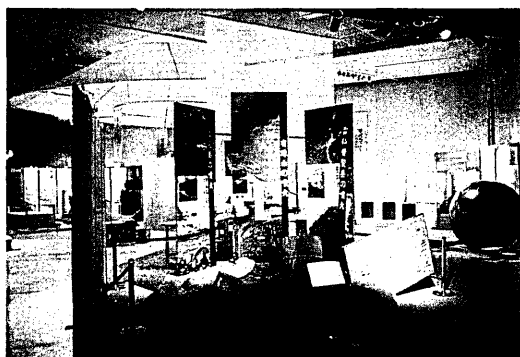


写真2 展示室全景1



写真3 展示室全景2

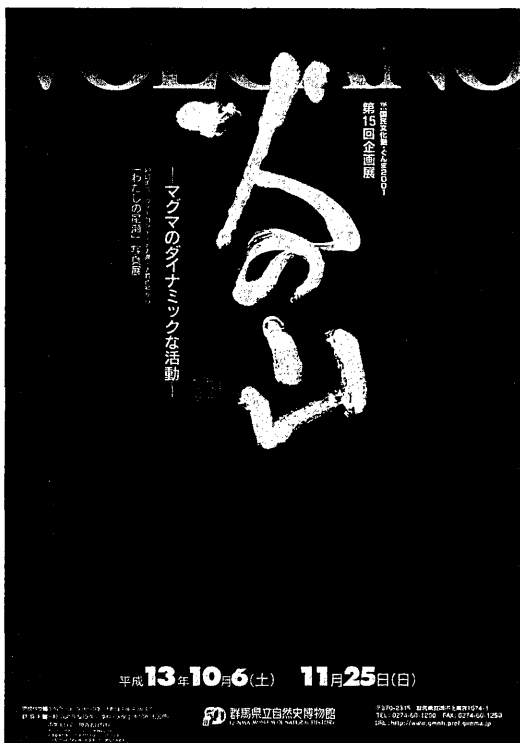


写真4 事前配布のチラシ

表1 アンケート集計結果

企画展「火の山」アンケート集計結果		票数	割合
来館に利用した交通機関	自家用車	79	81.4%
	団体バス	10	10.3%
	乗合タクシー	0	0.0%
	電車	6	6.2%
	レンタサイクル	0	0.0%
	その他(自転車)	2	2.1%
	(タクシー)	1	1.0%
企画展を何で知ったか	新聞	3	3.1%
	ラジオ	1	1.0%
	雑誌・ガイドブック・広報誌	2	2.1%
	ポスター	4	4.1%
	チラシ(ピラ)	13	13.4%
	インターネット	1	1.0%
	知人から聞いて	23	23.7%
	来館して知った	50	51.5%
面白かった展示は(複数回答可)	プロローグ ～日本の火山噴火史～	9	9.3%
	火山とは何か	11	11.3%
	マグマが作り出すもの	14	14.4%
	噴火	7	7.2%
	火山災害と恵み	16	16.5%
	石の実験コーナー	61	62.9%
	群馬の活火山	23	23.7%
	エピローグ ～火山県群馬～	2	2.1%
	その他	1	1.0%
	とても見やすかった	37	38.1%
展示の見やすさ	見やすかった	56	57.7%
	どちらでもない	4	4.1%
	見づらかった	0	0.0%
	とても見づらかった	0	0.0%
	展示物の高さ	8	21.6%
展示の見やすさで答えた理由(複数回答可) とても見やすかった(37人中)	展示物の並べ方	17	45.9%
	文字の大きさ	11	29.7%
	部屋の明るさ	12	32.4%
	通路の広さ	6	16.2%
	色の使い方	5	13.5%
	その他	1	2.7%
	(説明が聞きやすかった)	1	2.7%
	(標本のレベルの高さ)	1	2.7%
	展示物の高さ	12	21.4%
展示の見やすさで答えた理由(複数回答可) 見やすかった(56人中)	展示物の並べ方	36	64.3%
	文字の大きさ	7	12.5%
	部屋の明るさ	14	25.0%
	通路の広さ	12	21.4%
	色の使い方	4	7.1%
	その他	1	1.8%
	とてもわかりやすかった	24	24.7%
展示内容のわかりやすさ	わかりやすかった	56	57.7%
	どちらでもない	11	11.3%
	わかりにくかった	6	6.2%
	とてもわかりにくかった	0	0.0%
	とてもよかった	42	43.3%
看視員の対応	よかった	46	47.4%
	どちらでもない	9	9.3%
	悪かった	0	0.0%
	とても悪かった	0	0.0%
	新聞	38	39.2%
今後の企画展を知らせる方法	テレビ	21	21.6%
	ラジオ	10	10.3%
	雑誌・ガイドブック・広報誌	12	12.4%
	ポスター	18	18.6%
	チラシ	13	13.4%
	インターネット	17	17.5%
	その他	2	2.1%
	必要ない	3	3.1%

た。結果は、3人を除きオレンジ・茶・黄・赤とそのバリエーションの5色組み合わせを選択する人がほとんどとなった。そこで、中心となる色を赤系オレンジとし、サイン・パナー・パネルの基調色・印刷物に適用した（写真2・3・4）。

そのほかの色は、照明や展示台・背景紙などの色彩計画に生かした。照明は見せるための照明のほか、中央部の傘及び一部の壁に対して、赤色のアップライトを当てた。展示台は一部を除き、べいつが材を未塗装で使用し、黄～茶色系の色彩をそのまま生かした。背景には、システムウォールの灰色だけでなく、あえて段ボール紙を貼って茶色を生かすようにした壁も設けた。入口からは赤色のタイルカーペットを貼り分け、導線強調を行った。

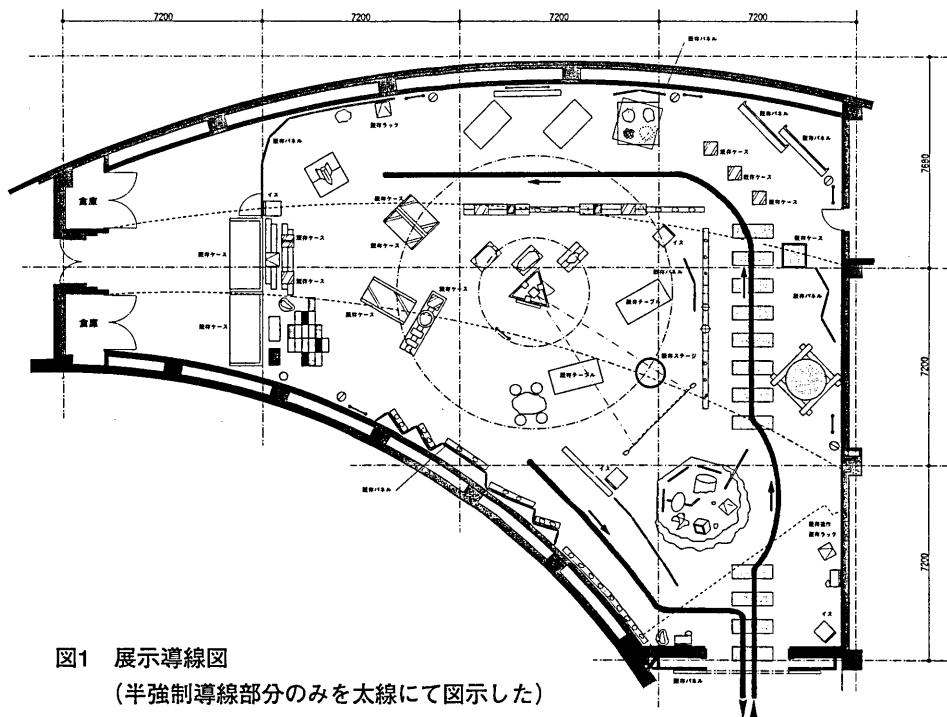
照明は、これまでの企画展と比較して暗めにした。照度について機器よる計測は行っていないので、数値での表示はできないが、固定照明については、天井ダウンライトが前回の企画展まで、スライダックボリュームフルで全点灯、間接照明が全点灯だったのに対し、当企画展ではダウンライトがスライダックボリューム約70%、間接照明半数点灯とかなり弱

くした。また、システムウォール等に後付けする照明機器の数についても20%程度少なく、床置きのアッパーライトには、赤色フィルターがかけられているため透過光は50%程度まで落ちている。さらには天井に大型の傘を吊り、外光をかなり遮断した。このように、低めの照度であるにもかかわらず、全体的に暖色系を多用したため、アンケートで見やすかった理由として「部屋の明るさ」をあげた人が多くいたことは興味深い結果である（表1）。

なお、アンケート調査は企画展示室出口にて、来館者任意抽出による来場者個別面接調査法及び来場者自記式調査法（酒井，2001）の併用で行ったものである。総回答数は101で、有効回答数は97である。1施設のアンケート標本数は、経験的500あればよいとされており、サンプリング誤差は次式で計算される（酒井，2001）。ここで E はサンプリング誤差（%）、 p はある回答の割合（%）、 n はアンケート標本数である。

$$E=2\sqrt{p(1-p)/n}$$

この式に当てはめ計算すると、今回のアンケート



ではサンプリング誤差の最大値が約10%となる。一般にアンケートを行う場合、サンプリング誤差は5%程度を想定して実施することが多い(酒井, 2001)が、今回のアンケートでも大まかな傾向をつかむことは可能である。

このアンケートからも個別の聞き取り調査でも、色彩について悪印象をもった人はいないようで、一応成功したと言ってよいと考えられる。

2-3 視線計画及び導線計画

当館の常設展で用いられている低い展示ステージ(300mmおよび450mm)は、来館者には好評である。今回の企画展でも、全体的に展示台の高さを低く抑さえ、可能な限り展示資料をガラスケース内に収納することを避けた。今回使用した展示台の高さは、床面より高600mm・中300mm・低200mm・超低100mmである。

展示パネルは枚数の都合で、2段貼付とした。上段パネルの中央点は床面より1,290mm、下段パネルの中央点は820mmとした。

日本建築学会編(1980)によれば、年齢10歳の日本人の目高は約1,210mmである。情報を正確に受け止められる視野は中心の30~25°の円錐体内で、視線高はやや下目であるほうが疲労は少ないとされている(倉田・矢島, 1997)。小学校中学年でも無理なく見ることができる高さとした。その結果、小学生だけでなく車椅子の来館者にも好評であった。

通路幅はこれまでの企画展と比較して広め(1,600~2,000mm)にとり、車椅子の使用も考慮した。展示物の間もやや広めにとった。これは多くの来館者に支持され、アンケートにもよく現れている(表1)。

導線は、「プロローグ」から「災害と恵み」までは半強制導線、それ以後は自由導線とした(図1)。最初に科学的事項を学んでもらい、その後は解放して自由に見てもらうようにした。これは、窮屈なところから急に解放されたとき、開放感を強く感じるという心理的な効果もねらっている。

今までの企画展では、入口と出口が異なる一方通行型の導線で展示を行ってきた。今回初めて、入口と出口が同場所となる導線とした。展示としては反時計回りの巡回を想定したが、来館者の動向を観察すると、かなりの人数が時計回りに巡回した。今後

同様な導線とする場合、サイン等の工夫が必要と考えられる。

2-4 石の実験コーナーの設定について

マクルーハン「展示の中に観客を巻き込むことが必要である」とシンポジウムで強調している(倉田・矢島, 1997)。完全にこの理論を実践することは困難であるが、少しでも近づける努力を試みた。

そこで、不思議な特性をもつ岩石・鉱物を用いた実験コーナーを設定した。このコーナーのねらいは、来館者が実際に見て触れる体験を通し、鉱物や岩石に対する興味・関心を高めるとともに理解を深めてもらうことである。テーマ選定に当たっては、理屈ではなく、思わずやってみたくなるようなものを選んだ。もちろん、安全かつ難しい操作を必要としないものが絶対条件である。

具体的には、企画展示室内中央にコーナーを設定し、インストラクターの支援のもと、表2に示した観察・実験を常時、来館者に行ってもらった。また、準備の都合上、曜日・時間と参加人数を制限したが、来館者にストーンペインティング(表2, 写真5)を体験してもらった。いずれの企画も未就学児童から一般まで幅広い参加があり、順番待ちができる実験・観察もあった。ストーンペインティングについては、非常に人気が高く、急遽参加人数の拡大、実施回数の増加で対応した。

企画展に関するアンケート(表1)によると、「面白かった展示は(複数回答可)」の質問に「石の実験コーナー」を選択した人は62.9%に上る。自由記述の欄にも、実験関連のものが楽しい、実験的な直接やれることを増やしてほしい、子供が体験できる企



写真5 ストーンペインティングの様子

表2 石の実験コーナーにおける観察・実験の内容

テーマ	試料	観察・実験の方法
石はかたいだけか	イタコルマイト (通称:こんにゃく石)	板状標本の中央部に荷重をかけすぎないように注意し、曲げてみる。
いい音がする	サヌカイト (通称:カンカン石)	専用のたたき棒を使い、加える力を加減しながら直接標本をたたく。
石を通してみると	方解石・ウレックサイト (通称:テレビ石)	文字や線などの上に標本を置き、二重に見える様子や浮き出で見える様子を観察する。
光る石	螢石	ブラックライト(紫外線)を当て、蛍光現象を見る。
こすりつけてみると	黄銅鉱・黄鉄鉱・赤鉄鉱	条痕板にこすりつけ、条痕色や鉱物の外観の色と条痕色との違いを比較する。
ストーンペインティング	河原の石	サインペン等を使って絵を描いたり、色づけをしたりして、置物やペーパーウエイトをつくる。土日・祝日に時間を決めて行い、制作者の希望があれば、作品を企画展示室内に展示する。

画を増やしてほしいなどの意見が見られた。

このコーナーで観察や実験に取り組む来館者の様子、聞き取り調査、アンケートの結果からも概ね当初のねらいを達成できたと言える。この試みをもとに、場の設定方法や内容等について検討を加え、“知的な遊び”の要素を吟味しつつ、来館者の知的好奇心・知的欲求にさらに答えられようになりたいと考えている。

3 印刷物及び広報

今回の企画展では、印刷物についても再検討する機会をもった。従来は、ポスター・リーフレット・図録を慣例により作製してきたが、以下のような問題点があることに気づいた。

① 入場者数の割に図録の購入者が少ない
(今まで最大でも入館者の約2%しか購入していない)

② 図録は購入者しか情報を得ることができない
(普及効果が低い)

③ 講演会等の関連行事をリーフレットに印刷したのでは、事前に広報できない

そこで今回は、思い切って図録を作成せず、版を大きくしたリーフレット(展示解説シートと呼んだ)を作製し、無償配布した。また、事前広報用にチラシを約30万枚作製し、教育事務所等を通じて県内の児童生徒すべてに1枚ずつ配布した。展示解説シートは、展示室入口や館エントランスなど複数箇所で自由に取ることができるようにした。しかし、無償でも関わらず、取らない人が多くいて、普及効果があまり大きくないという結果となった。今後、配布方法を検討する必要がある。

企画展終了後ではあるが、解説シートを授業に使

用したいので、譲ってほしいとの要望が中学校から数件寄せられている。現在のところ在庫に余裕があるため、希望通り配布している。この解説シートも後で述べる展示と同様に、教育課程に準拠して作製したため、このようなことが可能になっている。また、内容についてもよく吟味し、すぐに陳腐化しないよう工夫してある。会期終了後の思いがけない需要に館内でも驚きの声が上がっており、編著者としては大変光栄なことである。

さて今まで、群馬県内の県立博物館施設において65歳以上の人は無料であったものが、条例の改正で2001年10月1日から有料に変わった。これにより、10月6日開始の当企画展においては、来館者の減少が予想されたため、広報にも力を入れた。その1つが前述のチラシであり、そのほかインターネット広報・新聞や情報誌の広告・ラジオ出演なども前回までの企画展より多く行ったことがあげられる。

アンケートの結果を見ると、チラシで知って来館した人も13.4%いるが、圧倒的に来館して企画展を知ったというケースが多い。意外だったのは、知人から聞いて来館したという人が多いことである。改めて、「口コミ」というメディアの強さを認識した。今後の企画展を知らせる方法として、新聞を希望する人が多くいる。今までも今回も新聞には広報を出しているが、新聞で知って来館したという人は非常に少ない。これは、アンケート回答者が、小さな記事ではなく、大型の企業広告をイメージしている結果ではないかと考えられる。

開館して年数が経つにつれ、来館者数が減少してくる。これは当館にも当てはまることで、広報の仕方を根本から検討し直す時期にきていると考えられる。

4 関連行事

企画展開催期間中、4つの関連行事を行った。自然観察会・記念講演会・サヌカイト演奏会・岩石鉱物の鑑定会である。自然観察会・記念講演会・岩石鉱物の鑑定会については、従来から行われている行事と大きく異なるものではない。そこでサヌカイト演奏会について記す。



写真6 サヌカイト演奏会の風景

サヌカイトとは香川県讃岐地方に産する安山岩で、叩くと良い音がするので知られている。これを鍵盤状に並べ、叩いて演奏する。楽器は国内に数組しかなく、演奏者もごく限られている。今回は、サヌカイト奏者である臼杵美智代氏にお願いし、演奏会が実現した。演奏は、写真6のように博物館中庭で行い、出入り自由の無料とした。同じ曲目で2回演奏をしていただいたが、1回目105人、2回目122人の聴衆が集まり好評であった。多くは、来館してから知り聴いた人であったが、聞き取り調査によれば中にはこの演奏会のために来館した人も10数名程度あったことがわかっている。企画展の関連行事としては変化球ではあるが、マグマからできた石が思いもよらず、すばらしい音色を響かせたのには、皆一様に驚くとともに満足して聞いていただけたようである。

これにより、企画展の内容に完全に準拠したものだけを、関連行事として行う必要はないということが再認識された。このような発想の転換による行事が、今まで自然史博物館に興味をもたなかった人々に足を運ばせるきっかけとなったことは事実である。今後も、柔軟に行事を企画し、幅広い層の来館者を獲得していく努力を続けたい。

5 展示を使った中学校との合同授業

今回の企画展では、中学校理科の地学分野学習内容である「大地の変化」火山領域を念頭において展示を構成した。この企画展実施年度は教育課程の移行期であり、この領域は中学校1年生、3年生が履修することになっていた。この機会をとらえ、企画展示室を利用した効果的な学習が展開できると考えて、本授業を企画した。

授業実施日は、企画展終了後から5日間と設定し、企画展示室を占有しての博物館職員とのTT（ティームティーチング）の授業を近隣中学校へ提案した。呼びかけに応じた学校と協議をへて実施した。博物館側の準備は、この協議展示の撤収を1週間延期したのみである。借用資料の借用も、この授業を想定して長めに行っており、不都合は全くなかった。

この授業の目的は、企画展終了直後の展示室をそのまま授業の場として使い、実物資料を中心とした展示物と専門性の高い職員を効果的に用いた地学学習を、中学校教諭とともに行うことである。不特定多数の来館者を対象とした展示を、特定多数向けの学校教育に適用可能かどうかという学社融合の可能性を探るという実験的な意味も含んでいる。なお、来館校は表3のとおりである。指導者は博物館側が学芸課職員3名、教育普及課職員1名、学校側が各学校理科教諭1名である。具体的な流れは以下のとおりである。

まず、呼びかけに応じた学校と事前の打ち合わせを行った。各校とも状況や考え方が異なるので、打ち合わせはそれぞれ個別に行った。この中で、今回の合同授業を各学校の理科教諭が自分の授業のどこに位置づけたいのか、目標をどこに置くのかなどを話し合い、館から必要な情報・資料を提供した。この打ち合わせ内容と館からの資料をもとに、それぞれの理科教諭が授業展開を考え、当日使用するプリントを作成した。授業案やプリント案は館と学校との間で数回やりとりされ、細部までブラッシュアップしていった。授業案やプリントができあがった後、最終確認の打ち合わせを持ち、当日に望んだ。

当日は、全体の流れを各学校理科教諭が行い、展示物に関する詳しい解説を博物館職員が行った。生徒は各学校で用意したプリントを用いて、解説・質疑応答で得たことを記録しながら学習を進めた。実

表3 展示を使った合同授業参加校

学校・生徒数	日 時
富岡市立富岡中学校 105名 (自転車、片道所要時間約20分)	平成13年11月27日(火) 9:50～10:50 1年1組(35人)
	平成13年11月28日(水) 10:00～11:00 1年2, 3組(70人)
甘楽町立第三中学校 12名 (自動車、片道所要時間約20分)	平成13年11月29日(木) 10:30～12:00 3年(12人)
富岡市立北中学校 70名 (マイクロバス、片道所要時間約15分)	平成13年12月 1日(土) 14:00～15:30 2年(48人)

際は、生徒は事前に班分けされており、企画展を6つのコーナーに分け、それぞれのコーナーで10分程度の学習を行った(写真7)。時間の余裕がある学校については、展示室内学習が終了した後、別室で岩石薄片の観察を行い、火成岩のつくりやそのでき方を考察させた。

合同授業終了後、教師及び生徒にアンケート調査(自記式調査法)を行った。教師の回答数は3で、生徒の回答数は133である。教師用アンケートでは、学習内容と展示の親和性、実物資料の効果、博物館の専門性などプラスの評価がある反面、来館方法に関するマイナスの指摘があった。生徒用アンケートでは、知識の再整理・追加、実物資料による理解促進、展示空間における授業の新鮮さなどをプラス面として多くあげている。しかしこちらでも、来館方法に関するマイナス評価が多く見られる。

今回の成果として、主に以下の点があげられる。

① 企画展が、学校連携の主要な場面である授業で利用可能であるとわかったこと



写真7 中学校との合同授業の風景

② 中学校理科の学習内容を直接支援できたこと
今後の課題としては、アンケートでの指摘もあったように、来館方法の問題が最も大きい。博物館側で、輸送費や輸送手段を確保したりできるよう改善していく必要がある。

内容面では、自発的な学習を促すよう工夫したが、初めてということもあり、やや一方的な講義形態になってしまった。今後は学習形態を再検討し、生徒の自主的な活動を引き出し、生徒主体の学習が展開できるよう再構築しなければならない。

今回の企画展では中学校のカリキュラムを考慮して設計したため、中学校理科の授業支援が容易に行えた。理科の全分野に対して支援を行うことは、不可能である。もし今後の企画展で、このような企画を行うのであれば、展示の基本設計までに学校のカリキュラムとの接点を事前に把握し、実施設計までに実施学校とのすり合わせを入念に行う必要がある。

6 終わりに

展示設計を進める中で議論された内容をもとに、「進化する群馬県立自然史博物館—運動体としてのミュージアム—」という設計メモが手元にある。内容的にはすぐに実現不可能なものも含まれるが、従来の枠にとらわれない自由な発想を綴ったものであり、大きな可能性を秘めたメモである。

社会では構造改革が叫ばれ、大きく変わろうとしている。博物館も漫然と従来どおりの展示をしていたのでは、取り残されてしまうであろう。そのためには、新たな発想を生み出すような議論の場を、持たなくてはならない。そして、親しみやすく満足いただける博物館づくりを進めていきたい。

7 謝 辞

本企画展を開催するに当たり、資料提供・指導・協力いただいた各位及び各関係機関の皆様、合同授業に参加した先生・生徒諸氏には、心より感謝申し上げます。

また、展示構成にご協力いただいた永原誠氏、広報活動を精力的に行っていた野口喜充氏、印刷デザインをしていただいた大井田久氏、詳細設計を進める中でご議論いただいた野木道記・林慶二・藤井昭次・吉井哲哉・谷田久生の各氏、展示工事で細部にわたり当方の要望を聞き入れ製作していただいた天井宏氏及び技術スタッフの諸氏、アンケート調査を補助していただいた久保翔・早川賢治の両氏、多数重要なご指摘をいただいた匿名の査読者には、記して心より感謝申し上げます。

[引用文献]

- 小林重順（1997）カラーリスト—色彩心理ハンドブック—，159頁，講談社。
- 倉田公裕・矢島國雄（1997）新編博物館学，408頁，東京堂出版。
- 日本建築学会編（1980）建築設計資料集成 3 単位空間 I，223頁，丸善。
- 酒井 隆（2001）アンケート調査の進め方，234頁，日本経済新聞社。
- 渡辺保史（2001）情報デザイン入門 インターネット時代の表現術，237頁，平凡社。